

## 視点

# 子どもの萌芽的読み書き能力： 芽生えの中にある育つ力を引き出し、支える



奈良教育大学教授 横山 真貴子

私たちの社会では、身の回りに文字があふれています。そうした社会の中で、子どもたちは文字を完全に習得する前から、文字を読むまねをしたり、文字らしきものを書いたりしています。こうした読み書き能力の芽生えを萌芽的読み書き能力と言います。では、子どもたちはどのように文字を習得していくのでしょうか。その道のりをたどってみましょう。

子どもたちは、生活や遊びの中で文字に触れる経験を重ねることで、文字が絵とは異なることや、何かを表すものであることに気づいていきます。最初は、自分の名前の文字に気づくことが多いでしょう。例えば「まなか」という文字が、自分のおもちゃや洋服に書かれているのを何度も目にする中で、これらの文字が自分の名前を「表す」ものだとなるようになります。ただし、この時期は、一文字一文字が読めるわけではありません。文字のかたまりを「まなか」と捉えています。

文字のはたらきに気づくと、文字を読むまねをしたり、独自の文字を書くことを楽しみ始めます。「わたしも読んだり、書いたりできるのよ！」と言わんばかりに、ニヨロニヨロと線を書き連ね、「はい、お手紙！」と言って手渡してくれたりします。傍から見るとニヨロニヨロ線ですが、子どもにとっては、れっきとした「文字」です。書くという行為自体を楽しみ、遊ぶ時期です。

そうして書く経験を積み重ねる中で、文字の形にも次第に意識が向くようになります。見よう見まねで、文字らしい形が書けるようになってきます。書く活動を楽しみながら、書くことを学んでいくのです。

またこの時期、文字習得の認知的な基盤となる「音韻意識」も育ってきます。音韻意識とは、例えば「まなか」という連続音を「ま／な／か」の3音に分け、

最後の音は「か」だと取り出す力です。このように音を分解し、抽出する力が身につくと、1文字1文字が読めるようになります。拾い読みが見られるようになるのはこの時期です。

文字の読み書きが進むと、「表し、伝える」といった文字のはたらきをしっかり意識して、文字を使うとする姿が見られるようになります。5歳児6カ月の事例です。色水遊びが「ジュース屋さん」ごっこに発展し、いろいろな色のジュースが売り出されました。買いに来た子どもたちが「これ、何ジュース?」、「何ジュースがあるの?」と口々に聞きます。最初はお店屋さんの子も一人一人に答えていましたが、それでは大変。そこで「ジュースの名札を書いて置こう」、「メニューも作ろう」と、文字を書き始めました。

子どもたちは、教え込まれなくても、必要であれば、自分たちで文字を学ぼうとします。昆虫が大好きな子どもが、捕まえた虫の生態を詳しく知りたくて図鑑を開き、文字を読もうとする姿もよく見られます。また、文字がほぼ書けるようになった子どもは、「きれいに書きたい」と思うようになります。文字がほぼ読めるようになれば、「っ」などの特殊音節や助詞の「は」なども読もうとするようになります。

文字があふれ、文字の習得に高い価値が置かれる日本では、多くの場合、子どもたちは自然に文字へと目が向きます。生活や遊びの中で重ねてきた文字と関わる経験から、「読みたい」「書きたい」という切実な思いや必要感が生まれます。この思いが、文字の習得の原動力となります。

子どもたちの中にある、学びたい意欲や学びに向かう力を引き出し、支えることが教育の営みであると思います。